

しく有効な血液の使用法を確立する」時代であると結んでいる。

以上本書の概要を紹介したが、もう一つ特筆すべきは年表中に挿入された一八〇点に及ぶ医学切手についてである。著者は「医学切手友の会」（古川明会長）の会員として永年医学切手の収集に精進しているが、今回の著書にもそのコレクションの中から本文と関係の深い医学切手を選んで展示し文意を補っている。切手の中には輸血と直接関係はないが、医学の歴史から忘れてはならない人物、事項の切手なども含まれ、これが又この年表に医学史的な重みを加えているように思われる。

最後に欲を言えば、巻末に記載の参考文献と年表の記載との関連についてであるが、年表の宿命として詳細な記述は不可能である。だからこそ読者は簡潔な記載からより詳しい知識を望む時、参考文献の明示が是非欲しいと思われるのではなからうか。それともう一つ気付いた事、第二次大戦さ中、血漿の製造と保存に大きな貢献をなした米国の黒人外科医ドルー（Charles Richard Drew）の記載が無いのは何故であろう。彼の切手は一九八一年 Great Americans Series の一枚として発行されている。

とに角本書は医学切手収集家にとっては待望の書であると共に、医学の歴史に興味を持つ一般の人にも是非御一読をお薦めする次第である。

（小林 佑吉）

〔北欧社 一九九〇年 B五判 九〇頁 定価八、二四〇円〕

鈴木鑑著

『免疫学・血清学の歩んできた道』（第三版）

この道こそ鈴木鑑博士が自ら歩んで来られた道で、わが国で初めて創設せられた血清学教室（東大・三田定則教室）——緒方富雄教授の伝統の中に育ち、大成されたいわば血清学に土着された得難い専門家であり、永年の精進に多くの研究実績を積まれた斯道の重鎮である。先師緒方富雄教授のユニークな著述『血清学の領域から』、血清学講本、理論血清学などにも協力してこられ、血清免疫学談話会（三田定則会長）にも連なつて血清免疫学の歴史を推進して、戦後も Immuno-Advance の綜説を連載されたものに加筆された年表風に簡潔な血清学の歴史を述べられたのが本書の骨格である。

現在東大名誉教授として、また帝京大学教授として教鞭を執られ、直接講義を聞く学生や大学院生達は真に幸運であり、本書を座右に備え得る一般開業医家には特に進歩が急速で分子生物学が飛躍して理解し難い免疫学の吸収消化のために本書は有力な協力者であろう。内容はわかり易く整然と飾り気のない正確簡明な外、親切に主要原著論文の紹介が精密でその価値は極めて高い。正しく歴史を踏んで大極を掴み、かたよらず真理を理解し、先人の心にも触れ得ることは読んで快よく、楽しさが湧いて、嬉しい本である。特にX章は最近の新鮮な免疫学を平明に記述せられて著者の温かい心が伝わって来る。

茲に煩をいとわず目次の大要をあげると、その広さと深さがよくわかる。

I 免疫学の基礎 (一一～一二頁)

Jenner の種痘法 (Emanuel Timoni & Mary Worley Montagu, Jenner 夫人 Catherine Kingseot, Dorsetshire の農夫 Benjamin Jesty の名も逸つた)

微生物学の確立、Pasteur の業績、抗毒素の発見、食作用の発見

II 血清学の分化 (一一三～二六頁)

植物性毒素に対する免疫、溶菌反応とその機序、補体の発見、凝集反応の発見、沈降反応の発見、血清学の誕生、側鎖説 (Seitenkettenleorie) の提唱、血液型の発見

III アレルギー学の誕生 (二七～三五頁)

血清病の記載、アナフィラキシーの発見、Arhus 現象の記載、その他のアレルギー性反応、アレルギー説の提唱

IV 血清学の発展 (三七～五四頁)

抗原抗体反応の特異性、抗原抗体反応の最適現象、新しい抗原抗体反応、抗体、アレルギーに関する知見の発展、免疫化学の確立、格子説の提唱とその証明

V 血液型学の誕生とその発展 (五五～六八頁)

血液型 (ABO 式) の発見、ABO 式血液型の遺伝、ABO 式血液型の分布、MN 型の発見、Rh 型の発見、Rh 型の臨床的重要性、Rh 型の複雑性とその命名法、Rh 型以後の新しい血液型、赤血球以外の血液成分に認められる型

VI 血清学的診断法 (臨床血清学) の分化 (六九～八〇頁)

梅毒の血清学的診断法、その他の血清学的診断法

VII 免疫学の発展と変貌 (八一～九五頁)

予防接種、細胞性免疫、自己免疫疾患、移植免疫、免疫学的寛容、免疫病、腫瘍免疫、免疫学とは何か

VIII 現代の免疫学 I 血清学的な面から (九七～一二〇頁)

免疫学の研究領域、免疫予防と免疫療法、免疫病理学、組織抗原と移植、免疫化学、免疫学の研究計画、新しい抗原抗体反応、抗体の構造とその不均一性、抗体活性基の構造、抗原構造と特異性、補体の成分とその作用機序

IX 現代の免疫学 II 免疫生物学的な面から (一二一～一三三頁)

免疫応答の機構、抗体産生説、免疫応答にあずかる組織、免疫抑制、アレルギー反応の分類、遅延型過敏症に関する知見の発展

X 最近の免疫学 (一四三～一九三頁)

合成ワクチン (インフルエンザ、口蹄病、B 型肝炎)、GD (cluster of differentiation) の分類、新しい抗原抗体反応、酵素結合免疫吸着検査法 (ELISA)、免疫フロット法、免疫グロブリン遺伝学 (利根川らの研究、Leder らの研究、Hood らの研究)、抗イデオタイプ (抗-Id) 抗体、Jerne の説、抗イデオタイプ抗体の示す抗原活性、HLA 系、T 細胞レセプター、MHC 拘束性免疫応答、インターロイキンとサイトカイン、腫瘍壊死因子、細胞傷害性リンパ球、LAK 細胞、ウイルス感染による免疫異常症 AIDS (エイズ)

免疫学の専門刊行物の欄 (二頁) も親切であるが、免疫学血清

学年表(通年)や索引も正確で二〇頁を費して豊かさと温か味を添えている。これを重たい大著の Topley & Wilson's Principles of Bacteriology, Virology and Immunity 新刊などと比べると愚は「わな」が、軽快新鮮な「わな」I. M. Roitt: Essential Immunology や D. F. Gray, Immunology より断然優れて嬉しい本である。

(山中 太木)

〔近代出版 一九九〇年 B五判 二二三頁 定価二、〇六〇円〕

### 立川昭二著『最後の手紙』

死を目前にした故人の最後の一言は、その人の人生の最後を飾るしめくくりの言葉として重みのあるものである。それは人々に感銘を与え、私たちの胸を強く打つものがある。本書の著者もまた「人が最後に書く手紙は、その人の本質をもっともはっきりと表わし、その人の生涯をもっとも集約したことば」と受けとめ、そのことばに耳をかたむけることにより「そこからは、人は、どう生きるのか、人はどう死ぬのか、愛とはなにか、運命とはなにか——について、凝縮したことばが聞こえてくるはず」であると、本書の「はじめに」の中で記している。

よく知られる通り、著者はかねてから、人の死のかたちは時代により社会により異なるものであり、それをもっとも基本的に規定しているものは死因構造である、ということを中心張されてきた。

そして医学史や疾病史への深い造詣により、飢えやベストで人々が死んだ時代から、交通事故やガン、脳卒中などが死因となった現代へと、その死因構造、疾病構造の変遷をその時代と社会という観点から考察して、既に多くの著作を世に問うている。

本書もまた、単なる故人の遺書や辞世の収集というものではなく、「その人物の生き方や思想がもっともはっきり表われた最後の手紙は、その時代をもっともはっきり写し出した鏡のひとつでもある」との視点から、その死のかたちを規定したその時代と社会を探るものとなっている。ここでは、明治から現在までを四期に分けて、各時代それぞれ八人の「最後の手紙」を紹介する形をとっている。

即ちまず明治大正期を「時代の鼓動」と名づけて、病死した正岡子規、石川啄木、夏目漱石、森鷗外と、自死の藤村操、乃木希典、松井須磨子、有島武郎とをとりあげている。

次に戦前の昭和期を「彷徨する魂」と呼んで、芥川龍之介、野口英世、宮沢賢治、竹久夢二、寺田寅彦、立原道造、種田山頭火、河上肇らについて述べられている。

また戦中の昭和期は「山河はるか」として、佐々木清美、中村徳郎、鈴木肝一、佐々木八郎、竹内浩三、鈴木実、小西貞明、山本幡男の八人を紹介している。

そして最後の戦後の昭和期を「繁栄の陰で」と名づけて、原民喜、樺美智子、高野悦子、岡真史、西川喜作、亀田千春、山野井道子、土岐雄三らを紹介して解説を加えている。

これら個々の記載は夫々にいづれも感動的であるが、ターミナ